マザーレスチルドレン
カノウマコト

## ケンイチ

ケンイチは母親達による虐待を受けて育った。

ものごころがついた頃からまともな食事は与えてもらえなかった。

一日の食事がカップ麺一個というのが日常的だった。

いや何も食べられない日が一週間のうちに何日かあった。

ケンイチは本当の父親の顔を見たことがなかった。

誰からも愛された記憶がなかった。

ただ無慈悲な母親とその何人かの情夫から絶え間のない暴力だけは与え続けられた。

男達は理由もなく退屈しのぎの為だけにケンイチを殴った。

博打に負けた腹いせに横腹を加減なく蹴りあげられる事もしばしばだった。

---

老朽化した二階建てのモルタルアパート。

その日当たりの悪い一階の角部屋が親子の棲家だった。

母親は無職だった。

親子は母子家庭に政府が支給する生活保護費で生活していた。

もとより母親にとってケンイチはその保護費を受け取る為だけの存在に過ぎなかった。

男が泊まっていく夜、母親はケンイチの両手両足をナイロンの紐で縛ると体ごと洗濯機の中に押

し込んだ。

ケンイチは蓋を閉じられた洗濯機の中で首まで水に浸かりながら一晩過ごした。

母親はケンイチ一人を残して平気で二、三日帰ってこない時もあった。

そんな時は隣に住んでいる女が見かねてケンイチに手料理を食べさせた。

その女の手首には醜いリストカット痕が幾重にも刻み込まれていた。

食事の間ケンイチは女の妄想話を延々と聞かされた。

しかしそれだけが時折口にすることが出来たまともな食事だった。

ケンイチは小学校に通うようになったが、先生や同級生とは一言も口を利くことはなかった。

誰もケンイチが言葉を話す姿を見たことがなかったし、クラスの子供達に至ってはケンイチは口が利けないものだと思っていた。

それにケンイチの両腕の内側にある煙草を押し付けられて出来た無数の火傷の痕を気味悪がって誰もケンイチに近づく者はいなかった。

もちろん友達も無く孤独であった。

しかしそれはケンイチにとってどうだってよい事であった。

学校に行けばトウモロコシで出来たパンと人工牛乳だけは必ず給食として食べることができた。

ケンイチはまずくてみんなが食べ残したパンをこっそりカバンの中に隠して持ち帰った。

相変わらず母親からまともな食事を与えられる事はなかったが、

盗んだ給食のコーンブレッドのおかげで空腹の苦しさから抜け出すことが出来た。

# 金魚

ケンイチが十二歳になった小学校最後の冬休みにそれは起こった。

学校が休みに入って給食のパンにありつけない時、ケンイチは近くのスーパーで食料品を万引きして飢えを凌ぐことを覚えていた。

罪悪感などは微塵も持ち合わせていなかった。

しかし慢性的な食料不足に喘いでいるこの国では子供の万引きと言えど食品の窃盗行為は重罪であった。

見つかれば子供ですら袋叩きにされた。

ケンイチは店員に見つからないように細心の注意を払った。

この冬初めて雪が降った十二月のある寒い日、母親は昼過ぎに起きると男と出かけたまま夜になっても帰ってこなかった。

ケンイチは万引きしたクッキーを食べながらいつものようにテレビを見ていた。

液晶画面には軍服姿の男、その熱のこもった演説が一時間近く続いていた。

若いが強烈な存在感を放っている小男、この国の首相であった。

退屈してテレビのチャンネルを変えてみたが放送があっているのはこのチャンネルだけだった。

ケンイチはテレビに手を伸ばしスイッチを押した。

外は絶え間なく雪が降り続いていてひどく寒い夜だった。

テレビを消すとケンイチは何もすることがなかった。

ケンイチはクッキーを手に取ると風呂場に向かった。

浴室の棚には母親が飼っている金魚の小さな水槽があった。

ガラスのケースの中で一匹の金魚がゆらゆらと泳いでいた。

母親が可愛がってる金魚だった。

金魚は美しかった。

ケンイチは母親に隠れてこの赤くて綺麗な金魚を眺めるのが好きだった。

ケンイチは手に持っていたクッキーのカスを金魚の上にパラパラと落としてみた。

クッキーのカスは水面に落ちるとゆっくりと水槽の底に沈んでいった。

金魚は腹が膨れているのかそれには見向きもしなかった。

今度は一欠片のクッキーを水槽に落としてみた。

金魚はするりとそれを避けた。

ケンイチの足元にどこからともなく一匹のトカゲが現れた。

捕まえようと手を伸ばしたがトカゲは素早い動きで姿を消した。

ケンイチはめまいを感じてしばらくその場にうずくまった。

トカゲが身体の中に入り込んだような奇妙な感覚に襲われ吐き気がこみあげてきた。

おもむろに立ち上がるとケンイチは水槽の中に手を突っ込み金魚をつまみ出した。

右手の中で金魚はピクピクと蠢いた。

ケンイチは思いきり右手を握りしめた。

体中に電気が走ったような感じがした。

頭がしびれて足の感覚がなかった。

頭のしびれはだんだんと快感に変化していった。

ケンイチは初めて射精をした。

握り締めていた手をじわりと開くと金魚は無残に潰れていた。

ケンイチは金魚の死体をトイレに流すと部屋に戻った。

体の感覚はまだおかしかったが頭はすっきりしていた。

金魚を殺してしまったことを母親に知られたら間違いなく殺されるだろうとケンイチは確信した。

## 隣室の訪問者

部屋の中ストーブもつけず膝を抱えて座っていた。

隣の部屋から微かに話し声が聞こえてきた。

低い男の話し声が途切れ途切れに聞こえてくる。

隣の女の部屋に珍しく客が来ている。

ケンイチは壁に耳を当ててみた。

しかし話し声はすぐに止んでしまった。

かわりに何か人が争うような物音が聞こえてきた。

ケンイチはベランダに出た。

このアパートのベランダは繋がっていて石膏ボードで仕切られている。

ケンイチは手すりを乗り越えボードを回りこむと隣のベランダに移動した。

ガラス戸は閉まってカーテンが引いてあった。

ケンイチはしゃがみこんで気付かれないようにガラス戸を少しだけスライドさせてみた。

鍵は掛かっていなかった。

僅かだけカーテンをずらすと中の様子を見ることが出来た。

男が女の身体の上にまたがって首を締めあげていた。

二人とも裸だった。女は苦しそうに何か言っていた。

「シュンちゃん……シュンちゃん……」

男の名前を呼んでいるようだった。

突然男は顔を上げた。

逆光で男の顔はよく見えない。

目を凝らすと男と目が合った。

男がケンイチに向かって手招きをする。

操られるようにケンイチはガラス戸を開くと部屋に入った。

ケンイチは男の顔を見た。

男の下で横たわってる女を見た。

女の顔は固く目が閉じられていて本当に隣に住む女なのかどうかということがケンイチには曖昧になっていた。

男はケンイチに向かって低い声で何か囁いた。

男が何を行っているのかケンイチには聞き取る事が出来なかった。

突然男がケンイチの首に触れた。

その瞬間、身体が震え身動き一つ出来なくなった。

男が強い力でケンイチを引き寄せる。

男は両腕でケンイチの首を締め付けた。

ケンイチは息が出来なくなりもがいた。

頭の中が一瞬真っ白になった。

「こうやるんだ。お前を痛みつける者を。いいか、うまくやらなければまたオレと会うことになるぞ」

男はそう言いケンイチの首から手を下ろすと、向こうへ行けというようなジェスチャーをした。

静かにケンイチはその場を離れた。

## 初雪が積もった朝

明け方近くになって母親は男と一緒に帰ってきた。

泥酔状態の母親を残して男はすぐに出て行った。

寝たフリをしていたケンイチは起きだしてきてリビングルームで酔いつぶれている母親を見下ろしていた。

ケンイチは用意していた電気コードを母親の首に入念に三回巻きつけた。

それでも母親はだらしなく横たわったままだった。

床に尻をつけると電気コードをしっかり両の手のひらに巻きつけ握りしめた。

そのままの姿勢で両足を母親の肩に乗せて固定した。

足を踏ん張ると同時にコードの両端を渾身の力で引き上げた。

さすがに母親も目を覚まして激しく暴れだした。

ケンイチはさらに力を込めた。

コードが食い込み鈍い音を立てて喉の骨が砕けた。

ケンイチは締め続けた。

突然母親はがくがくと痙攣しはじめた。

小さく呻き声を上げた後母親は動かなくなった。

長い時間のような気もしたが、あっと言う間の事のようにも思えた。

ケンイチは母親を絞殺する間に二度目の射精をした。

苦悶の表情を浮かべた母親の死顔を見てると可哀そうになった。

母親の顔に手を触れてみた。

冷たかった。

悲しくはなかった。

「カアサン・・・・・・」声を出してそう呟いてみた。

突然激しい寂しさが溢れてきてケンイチを襲った。

今更どうすることも出来なかったし、すぐにどうでもよい事に思えてきた。

ケンイチは、洗面所行き時間を掛けて入念に両手を洗った。

洗い終えて顔を上げ鏡を見た。

鏡に映る自分の顔が見る見るうちに歪んでいく。

それはやがてトカゲに変わった。

朝になりケンイチは家を出た。

初雪が積もった街はやけに眩しかった。

## 廃棄物処理場

「君は何故ここに来たんだ？」

ベッド上で上半身を起こしている老人がハルトに問いかけた。

老人と言っても見た目はそんなに年老いた感じはしない。

ただ異様に痩せて肌は荒れてカサカサだが眼光だけは鋭い男だ。

「他にすることもないから」

ハルトはそう答えた。

「そうか。今は大変な時代だからね。でも多くの若者は政府の生活支援プログラムで遊んで暮らしてるじゃないか」

「別にそれでもいいんですけどね。ただ人を探してるんです。もしかしたらここで会えるかもしれないから」

―――確かにまともな人間のする仕事じゃない

放射線被爆者療養施設の仕事は過酷だった。

寝たきりの患者達の食事と排泄の世話。

一日平均十五時間労働。

支払われる給料は政府の失業者対策の支援金とさほどの変わりははなかった。

「誰を探してる？」

「子供の頃に別れた母親を……もうここに運び込まれてもいい年齢になってるから」

先程の老人に食事を与えると今日の仕事は終わりだった。

ハルトが働いているこのセンターは常時約三百五十名の患者を収容している。

施設入居者の平均年齢は四十七歳であった。

このセンターは放射線を直接あびて被ばくした者と放射性物質の含まれた食物を食べ続けたせいで内部被ばくした者が入居する施設である。

この国の水とあらゆる食べ物には放射性物質が含まれていた。

その汚染された食物を食べ続けた人々の余命は通常の場合の半分以下になると云われていた。

放射性物質は毎日の食事として口から入り胃や腸、更に消化吸収されて人体の様々な臓器を少しづつだが確実に破壊していく。

現在この国で生きているの国民の直接被ばく者と内部被ばく者を合わせた数は全人口の八割に達していると云われている。

その数およそ五千万人。

国民の平均寿命は五十歳に満たないとの試算が発表されている。

この施設に運び込まれてくるのは、放射能毒に犯されて末期的な症状の死を待つだけの人たちだ。

彼らはこの施設で積極的な治療を受けるわけではない。

死ぬまでの残り僅かな時間をただここで過ごしているだけだった。

町外れの小高い丘に立っているこの施設「丘の上ホーム」は別名、廃棄物処理場と呼ばれていた。

---

「ハルトくん。今帰り？」

センター長のモリタがロビーを歩いていたハルトを呼び止めた。

「はい、今終わったとこです」

ハルトは立ち止まりモリタの方に振り返るとそう答えた。

天井の蛍光灯の光が無機質なリノリウムの床に鈍く反射している。

「今日は女の人が五名緊急搬入されたけど、知ってた？」

ハルトに近づきながらモリタは言った。

「はい、確認しました。だけど違ってました」

そういいながら足元に視線を落とすハルト。

「そうか」

「母はきっと、外の世界で暮らしてるんだと思います」

「うーん、外の世界のことは実は政府もはっきりとは把握してないらしいからな」

「そうですか」

「それに政府のいうことは信用できない、まだ相当の数の人たちがまだあっち側で暮らしてるよ」

「はい、壁の外側が現在どうなってるのか誰も知らないし」

「そうだね。でもあきらめないで希望もって。お母さんに、早く会えるといいね」

「はい、ありがとうございます」

待合ロビーのソファーに座って数人の患者がテレビを観ている。

テレビの女性キャスターが昨夜発生した殺人事件の詳細を伝えている。

「また水曜日にバラバラ殺人事件です」

この居住区近辺では半年の間に女性が夜道で襲われ殺されるという事件が連続して八件発生している。

手口は皆同じで被害者は首をひも状のもので絞殺されたあと、どこか別の場所に運ばれる。

そこで遺体は電動ノコギリを使いバラバラに切断、解体された。

翌朝、街角の比較的目立つ場所でゴミ袋に詰められた酷たらしい状態の遺体が発見される。

放置された遺体の主立った肉は鋭利な刃物で削ぎ落とされたあと持ち去られていた。

顔面は比較的に綺麗な状態であったが、例外なく被害者の片方の眼球だけが抜き取られていた。

なんとも惨たらしい猟奇的な連続殺人・死体損壊事件である。

「同じ女性として決して犯人をゆるすことができません」と彼女は締めくくった。

---

「変質者の仕業だろうけど、物騒な世の中だ」

テレビから目を離しモリタは顔をしかめていった。

「ええ」ハルトも顔を曇らす。

「あ、引き止めて悪かった。じゃあ、気をつけて」

「はい、お先に失礼します」

ハルトはモリタに挨拶をして上履きからスニーカーに履き替えると玄関を後にした。

今夜は風はなくひどく蒸し暑い夜だった。

空には月もなく曇っていた。

センターの建物を出るとハルトは駐車場に停めてあった小型の電動バイクにまたがった。

ヘルメットをつけて左腕につけた腕時計の有機液晶のパネルを見た。

緑色の発光ポリマーの光が西暦二千十五年、七月十八日、午後七時二十分を表示している。

今夜は行きつけの食堂で食事をするつもりだった。

## 東和食堂

「いらっしゃい……。おお一久しぶりだねぇ」

仏頂面で仕込みをしていたマスターはハルトの顔を見ると笑顔になった。

「どう、調子は？」カウンターの中の椅子に腰掛けてマスターはいった。

「別に変わった事はないよ。マスターの方はどう、忙しい？」

この居住区の中心部に当たる東和町にある東和食堂、ハルトはこの店の常連だった。

店のカウンター席の一番奥に腰掛けながらハルトは携帯電話を取り出した。

着信の履歴も新着メールの表示もなかった。

「相変わらず暇よ、今日はハルが初めてのお客。そろそろこの店も潮時かな」

マスターは頭巻いたバンダナをとりながら立ち上がった。

「最近ご無沙汰だったけど元気にしてたの？　うちの嫁さんも心配してたよ」

「うん、最近なんだか疲れ気味で何をするにも億劫になっちゃってね。何かやっぱ少しづつ内臓が腐ってきてるのかな」

「あはは、ハルはまだ若いから大丈夫だと思うよ、オレはもう歳だからあちこちガタが来てるはずだけどね。でもまあ、なんとか全然大丈夫よ。元気元気」

「マスターは、子供たちの為にまだまだがんばらなきゃね。ところでレイコさんは元気にしてるの？」

「最近蒸し暑いからね。実はオレもちょっとダルくて参ってる。レイコは元気にしてるよ。今は子供たちと出かけてる。

リカのクラスの友達の誕生会かなんかでユウジも呼ばれてね、一緒に。ほら駅の向こうにでかいマンションあるじゃない、あそこまで」

「大丈夫？　ほら、最近物騒じゃん、昨夜だって」

「ああ、水曜日の…。大丈夫、今日は木曜日だし。それに二人も子ども連れてちゃあ、さすがに犯人も襲えないよ」

「そうだね」

ハルトは笑った。

「リカとユウジともしばらく会ってないね、どうしてる最近は？」

「うん、まあ元気に学校通ってるよ。最近は生意気になってね、二人共。レイコも大変よ。まあ、オレはここで毎晩遊んでるけど」

「そっか、でもマスターは偉いよ。子供育ててるから、二人もね」

「あはは、でもいつ放り出すかわかんないよ。この店ももうヤバイもん、閑古鳥が鳴いてるよ」

マスターは笑いながらプレイヤーにCDをセットした。

「いつものでいい？」

「うん、いいよ。お腹減ってさ。あ、先にビールね」

「あいよ！」

## I Shall Be Released

The Bandの演奏するアイ・シャル・ビー・リリーストが壁に埋め込まれたスピーカーから流れてきた。

ボーカルの搾り出すようなファルセットが淀んだ店内の空気を僅かに震わせた。

すべてのものは

置きかえられるという

でもすべての距離は

はっきりしていない

だからおれはすべての

顔を覚えている

おれをここに置いた

すべての人の顔を

おれの光が

輝いているのがみえる

西から東へ

もういつでも

そういつでも

そしておれは

　　解き放たれるだろう

この国は今から二十年前の西暦一九九五年に破綻した。

それは小さな経済新興国の取り付け騒ぎが発端だった。

取るに足らない小国のデフォルト。

しかしそれをきっかけしてに世界経済のバランスが崩れ、先進国と言われていた殆どの国が連鎖的な経済危機に陥ってしまった。

行き過ぎた市場原理主義、資本主義社会の崩壊だった。

各国の株価は地に落ち、主要通貨は暴落し紙くず同然になった。

過去最大級の世界恐慌、世界中の国々で失業者が溢れかえった。

国債の暴落、凄まじいインフレの発生。

主要各国はこの国の高品質で高価な製品を買い取る経済力を失ってしまった。

もうこの国の世界に対する経済的影響力はゼロに等しいと云えた。

完全失業率四十五パーセント、食料自給率五パーセント。

そして最悪のシナリオが待っていた。

この国を含む周辺地域の国々は数年前に締結された協定により加盟国間のすべての関税を撤廃していた。

自国の工業製品を海外により安価に輸出し有利な貿易を行う事と引き換えにこの国は食料自給へ回帰する道を捨てたのだ。

あらゆる農作物、海産物、畜産物は近隣諸国から安価で輸入された。

その事によってこの国の農業および漁業、畜産業、その他、第一次産業のほとんどは消滅して行った。

経済ショックが世界を震撼させた翌年、未曽有の食料パニックが発生した。

この年世界的な異常気象の影響で農作物への被害が相次ぎ、穀物相場は急上昇、同時に家畜パンデミックの大流行で各国の家畜数は激減した。

世界的な食糧不足時代がはじまった。

急遽全ての食料輸出国は自国民の食料を確保するために極端な輸出規制を行った。

外国に売る食料なんて存在しなくなったのだった。

各国はブロック経済体制を取り始め、再び世界経済は分断された。

それは資源がなく工業製品の輸出に頼ったこの国の経済にとって大きなダメージとなった。

食料自給率が異常に低いこの国はたちまちかつて無いほどの食糧難に見舞われた。

この国はあっけなく崩れ落ちた。

飢えで死んでゆく人の山また山。

国民は政府に対する不満を爆発させた。

市民の食糧配給に対する抗議デモは次第に大きな運動となっていった。

それはやがて暴動となり国中を巻き込んで拡大した。

国内各地で荒れ狂う暴徒。

当時の政府は暴徒を鎮圧するために強硬手段を投じ軍隊を派兵した。

戒厳令がしかれた。

多くの民衆の血が流れた。

それでも食料に飢えた人々は当時の政府と戦った。

この攻撃に対し軍の一部が反乱を開始した。

軍隊の幹部によるクーデター勃発、そして強大な反体制組織が生まれた。

革命戦争の始まりだった。

戦いは日を追うごとに激しさを増していった。

そしてテロリズムも横行した、狂ったテロリスト集団が混乱に乗じ国内の主要原子力発電所を同時多発的に爆破したのだ。

原発依存度の高かった大都市への送電は瞬時にストップしこの国は暗闇に包まれた。

そして最悪なことに数基の原子炉が制御不能に陥り炉心が融解爆発した。

この事で原子炉内の放射性物質が大気中に大量に放出された。

当初、政府は住民のパニックや機密漏洩を恐れ、放射能漏れの事実を公表しなかった。

また、付近住民の避難措置なども取られなかったため、多くの人々が甚大な量の放射線をまともに浴びることになった。

高濃度の放射性物質で汚染された土地は居住が不可能になり、数百万人が移住を余儀なくされた。

首都を含め主要都市は壊滅状態となった。

政府軍も同盟国の協力を得てテロリズムに徹底的なよる報復を……。

しかし全ては遅すぎた。

パンドラの匣は開けられた後だった。

五年続いた泥沼の内戦が終わると、勝利した革命軍の若きリーダーが新政府を立ち上げた。

開戦時一億二千万人いた人口は革命終了後には半減してしまった。

なんとか残された六千万人は新時代の幕開けを迎えることが出来た。

希望に満ちた新しい時代が訪れると誰もが信じていた。

しかし実際にはそうはいかなかった。

漏れ出した放射能はこの国を覆い尽くしていた。

そして世界はこの国を見捨てた……。

## ドブネズミ料理？

「いただきます！」

ハルトは運ばれた料理に箸をつけた。

下味をつけた食材に薄い衣をつけ多量の揚げ油で揚げたもの。

一応肉料理のようだが何の肉かはわからない。

マスター鶏肉だと言い張るが本当は違うはずだ。

本当の鶏肉ならこんな安価で提供できるわけがない。

安く手に入る肉はどっかの業者がドブネズミを繁殖させて食肉用として闇でさばいているものだともっぱらの噂だった。

それでもハルトはマスターが作ってくれるこの料理が大好きだった。

今の子供達は家庭では完全食と言われるドッグフードみたいなまずいクッキーと何種類かのサプリメント、人工ミルクだけしか与えられていない。

有害物質の入っていない安全な食べ物なのだが味気なくてハルトは可哀そうに思ってしまう。

でも子供たちの健康を維持していく為にはそうするしかなかった。

「やっぱりマスターの料理は上手いよ」

ハルトはお世辞じゃなくそういった。

「うれしーね、そう言ってもらえると。でもね、材料がまた高くなってね。この値段でいつまで出せるかわからないよ」

マスターは最初笑って次に暗い顔になった。

肉を頬張りながらグラスに注がれたよく冷えたビールを飲む。

みんなはビールと呼んでいるがこの泡立った液体は国産トウモロコシで造られている。

ホップの爽やかな香りが食欲をそそる。

よく出来ているがまがい物。

おそらく本物のビールとは程遠いものだろう。

ハルトは本物のビールを飲んだことがなかった。

「やっぱり子供たちは安全食しか食べさせてないの？」

「うん、たまにはオレの料理食べさせてやりたいけど、レイコのやつが絶対許さないからな」

「そか、でも仕方ないね。かわいそうだけど」

「そうそうドッグフードだけ食べて育つ犬みたいでな、オレは絶対嫌だな。でも子供たちの前ではそんな事いうなって、レイコが」

「そりゃそうだよ、子供たちだって好きであんなドッグ……。いや安全食食べてるわけじゃないし」

「うん……。好きなもん食えないってよな。辛いだろうな、育ち盛りだっていうのに」

「でもまあ、二十年前の食糧難は酷かったからな。あの時に比べれば今のガキは幸せだよ、ハルも生まれてなかったから知らないだろ」

「うん」

「あの頃、オレはまだ高校生だったし一番腹減る頃じゃん。部活行ってたし。地獄だったな……思い出してもゾッとする」

「いきなりきたの？　食糧不足」

「そうそう、いきなり。あっという間にスーパーから食べもんがなくなった」

「へえ」

「それまでは普通になんでもあったんよ。何でも食えた。カレーにラーメンだろ、牛丼、回転寿司。ハンバーガーだろ。
それにフライドチキンだろ。スパゲッテイーにたこ焼き。お好み焼きに……」

夢中になって喋るマスター。

「もういいって、マスター」

ハルトが手を振って制止する。

「おお、ごめん興奮した。まあ、本当に普通にみんながそんなの食ってたの。今思うと夢のようだろ」

「うん、オレの給料じゃ食えないよ、そんな高級料理」

ハルトがため息をつく。

「まあな、今じゃあオレも食えないよ。政府発行のフードスタンプじゃあ無理だな。まあタコ焼きくらいは食えるけどな」

マスターは苦笑した。

## 最悪の世界恐慌

「それでさあ、世界恐慌が来たかと思うと、翌年には異常気象と家畜病流行で食料難がきて、世の中からあっという間に食べ物が消えた」

「うん」

「地獄だった、人間食えないっていうのが一番こたえるな、そこら辺に生えてる草は全部食ったよ。
そして犬や猫も食った。酷いだろ、でも仕方なかったんだ。生きていくためには」

「そうなんだ……」

「うん、食べ物がなくなって、食べもん取り合いで殺し合いもしょっちゅう起こってた」

「……」

「だからさあ、今の方がましなの。確かに今だってろくに仕事もないけど、今の政府は国民の最低限の生活は保証してくれてる。
低所得者にはフードスタンプ。就職難で就労できない若者には支援金、それ以外の失業者や年寄りや病人には失業手当と
ベーシックインカム（基本所得保障）。一応ギリギリの生活だけど飢え死にすることはなくなった」

「そうだね、ましかな……」

「そうそう、世界恐慌の頃、前の政府はさ、膨れ上がる失業者対策として何の社会保障も提案できなかった。だからあの頃は自殺者が一気に増えたんだ」

「うん、でもね。施設で働いててると毎日死んでいくじゃん、入居者がさ。これでいいのかなって思うよ。人の一生ってなんなのかなって……」

「放射性物質……　ハルは毎日死んでいく人見ってからな……。貧乏人は安全な食品なんて高くて食えないし、わかんなくなるよな、確かに」

「うん、水と食品に混入してる放射性物質はまだ除染できないんだ、土壌も汚染が進んでるし、相変わらず政府はこの件に関して正しい情報を開示しない。

大体ネオシティの外の世界がどうなってるのかさえわかんないしね。
外部の人間は放射能を取り込んで体内で濃縮してしまう生体濃縮が進んでひどい有様だって聞くよ。まあ、あくまで噂レベルだけど……」

「うーん、かと言って、安全な輸入食品は俺たち貧乏人には高嶺の花だ」

「うん、リカやユウジが大人になる頃って……どうなってるんだろうな、良くなってるって思う、マスター？」ハルトはマスターに尋ねる。

「そりゃあ……。あいつらは健康だし俺達と違って長生きもできる。でも今後この国の状況が良くなるのは考えにくいな」

「だね」

「だからアイツらは頑張って勉強してもらって将来は友愛党員になってもらうしかないって思ってるよ、オレもレイコも」

「友愛党かあ……」

ハルは天井を見上げた。

「でも部活終わってさあ、腹減ってて、帰り道のコンビニでお湯もらって作った食ったカップラーメン。あれが一番かな、うまかった思い出でいうと」

しばらくの沈黙の後、マスターがしみじみといった。

「まだ言ってんの」

二人は爆笑した。

## 外の世界

「ところでどう、お袋さん見つかりそう？」

「うん……　なかなか難しいよ。手掛かりが無いから」

「そうねえ、別れてからずいぶん経ってるから……顔だって変わってるだろうしね。ハルだってもう子供の頃とは全然違ってるだろうからね」

「うん、そだね。もうだんだん記憶が曖昧になってきてるんだ……」

「やっぱり、壁の外にいると思う？」

「うん、昔あっち側に住んでたからね」

「そか、あそこじゃあ、俺達は自由に行き来はできないからね」

「もう死んでいるかもね、もし生きていたとしてもはそんなに長くはないだろうし」

「そんなことないよ！　絶対どっかで生きてるって、きっとお袋さんもハルに会いたがってるよ」

「だといいけど」

「……でもさあ、なんでお袋さん、ハル残していなくなっちゃったんだろうな？」

「……」

ハルトは無言で目を伏せる。

「ごめん、ハル」

「いや、いいよ」

「あの頃はまだ革命の後のどさくさで大変だったもんな、きっとハルのお袋さんもいろいろな事情があって、ハルを安全な児童施設に預けたんだろうな」

「うん……」

## のんだくれカジさん

入り口のドアが勢い良く開かれて一人の男が転がるように入ってきた。

大きなショルダーバッグを肩にかけた四十を少しこえたくらいに見える中年だった。

ハンチング帽にヨレヨレの半袖シャツ。

かなり汚れが目立つジーンズを履いていた。

すでにかなり酔っているようだった。

「また来たよー」

「いらっしゃ…… なんだカジさんか」

「悪かったね、マスターオレで」

カジさんと呼ばれた男、おぼつかない足取りで三席あるテーブル席の一番入口に近い椅子にドカッと腰を下ろした。

「またかなり出来上がってーー　一体どこで飲んできたんですか？　今日は早めに帰ってくださいよね」迷惑顔でマスターは言った。

「うんうん、分かってるよ。昨日は悪かったね。朝まで付きあわせて」

「そうですよ、オレも随分酔っ払ってたけどあの後でレイコと大喧嘩だったんだから」

「すまんすまん、今夜は少しだけ飲んだらすぐに帰るからさ」

「もう、カジさんはかなり酒癖悪いんですからね、昨日も絡みまくってましたよ。覚えて無いでしょうけど」

「分かってる、分かってるって、マスター、じゃ、とりあえずビールね」

「あいよ」

マスターは冷蔵庫から瓶ビールを取り出すと慣れた手つきで栓を抜き、グラスと一緒にカジの座るテーブルに置いた。

カジは手酌でビールをグラスに注ぐとその泡立って不自然に黄色い液体を一気に飲み干した。

「ふぅぅー、仕事が終わっての酒はやっぱ最高に旨いね」

「よく言うよ、仕事なんてしてないくせに」

マスターは苦笑いしながら小声で呟いた。

「聞こえますよ、カジさんに」

ハルトが心配してマスターに小声でいった。

「あー、ハルちゃんいたの、 わかんなかったよ。そんな隅っこにいるから。大丈夫ちゃんと聞こえってから。オレはねえ昔から耳はいいのよ。
だってさあ、昔ミュージシャンやってたから。まあ、今でも現役のバンドマンだからね」

カジは大声でハルトに話しかける。

「ハルちゃん、オレはねぇ、ちゃんと仕事してるよ。そうだ今やってる仕事のお金入ったらさ、ハルちゃんを寿司屋に連れていってやるよ。
旨いよ、寿司は。こんなしけた店のわけの分からない食い物と違ってさ」

「悪かったね、カジさん。わけの分かんない料理で。ウチの唐揚げは人気メニューなんだよ！」

「そうだよ、カジさんこの唐揚げ定食、最高にうまいよ、食べたことないの？」ハルトが言った。

「けっ、そんな何の肉使ってるかわかんない唐揚げなんて食えたもんじゃないよ、ハルちゃん」

「でも、マスターの作った唐揚げサクサクしてマジでおいしいよ」

「ドブネズミの肉じゃねえの？　噂じゃあ……」

「カジさん！ そんなこと言ってるとまた出入り禁止にしますからね、ウチのはれっきとした鶏肉の唐揚げ！」

マスターは、苛立たしそうにそう言った。

「わかったって、マスター。ちゃんとマスターも連れて行くから、寿司屋」
カジは少し焦った様子で言った。

「いいよ、オレは行かない。行きたくないもん。重油と水銀まみれの海で捕れた放射能汚染したサカナで握った寿司なんか食えたもんじゃないし」

「分かった、じゃあハルちゃんと二人で行くわ」

「勝手にして下さい。っていうか、カジさん仕事して無いじゃん」

「失礼な！　マスターよぉ、オレは建築家だぜぇ、それも超一流の。一級より上、言うなら特級建築士だぜ。
仕事のオファーは腐るほどくるけど気が向かない仕事は一切受けない主義なの。安売りはしないんだよ」

カジは得意げにまくし立てた。

「またその話かよ。フレンドシップスクエアはカジさんの設計でしたね。聴き飽きましたよ、いい加減。
うちのツケも払えないくせによくいうよ」

マスターは呆れた様子で嫌味を言った。

「まあまあ二人とも、もういいじゃないですか、やめましょうよいい加減で」
ハルトが仲裁にはいる。

マスターは不機嫌顔で、カウンターの奥の椅子に腰をおろすと前掛けのポケットから煙草の箱を取り出した。

慣れた仕草で煙草を一本取り出し口に咥えるとオイルライターで火をつけた。

「あれ、マスター煙草止めてたんじゃなかったっけ？」

「ああ、また禁煙失敗。仕方ねえな、オレ意志が弱いからさ。
大体さあ、健康のための禁煙なんて意味無いじゃん。
俺達はどうせ長生きなんてできないんだから」
マスターは不味そうに煙を吐き出しながらそういった。

「そうそう、マスターのいうとおりだ。全くひでぇ時代になっちまったもんだ。
夢も希望もあったもんじゃねえ。飲まないでやってられるかってんだ！　ネオシティなんてクソ食らえ！
本当にクソみたいな国だ。この国はよぉ、全く」

カジが身体を左右に揺らしながら大声で喚いた。

「でも子供たちのために少しでも長く生きていたいって言ってたじゃない。
マスターもレイコさんも」

「まあ、そうなんだけど。こんなひでえ時代だろ。いろいろあるんよ生きてるとさ。ストレスっていうか」

マスターは灰皿に視線を落としてそういった。

そして何気なくカウンターの横の小窓から外を眺めた。

「げ、あいつらまた来てるよ」

「昨日いたガキどもか？」

カジが身を乗り出して言った。

「昨日なんかあったの？」ハルトが尋ねた。

「うん、ちょっとハルもこっち来て見てみなよ。気味悪いから」

表の通りで街灯の下、改造を施された大型の電動バイクに股がったアーミー服に
身を包んだ数人の少年達がたむろしている。

先頭で大きめの黒いサングラスを掛けた少年が静かにこちらを窺っていた。

「昨晩もあんな感じであそこで集まってたんだ。ねえ、カジさん」

「うん、ホームレスチルドレンとか言われてる奴らだよ」

「マザーレスチルドレンだろ」

マスターがツッコミを入れる。

「そうか、まあよく知らねえけど、あちこちで悪さしてるらしいよ。
親に虐待受けた可哀そうな子どもたちだって新聞には書いてあったけどよ」

カジが顔をしかめながら話した。

「マスター、一応黒服隊に通報したほうがいいんじゃない？」

「でもあいつらまだ何もしたわけじゃないし、ただ集まってああやってるだけだしね、今のところ」

マスターはいった。

黒服隊とは、現政府の下に配置された武装行動隊の俗称であり旧体制の警察と自衛隊の役割を統括再編した組織である。

主に国や地域の治安の向上を目的に編成された部隊で正式な名称は国防義勇軍といった。

しかし真黒の軍服で街を闊歩する姿は常に威圧的であり、今では陸海空軍と並ぶ第四の軍隊と云われていた。

「それに黒服の連中はあてにならないよ、通報してもまともに来た試しがないし最近は通報の電話にも出ないらしいよ。
奴ら交通違反との闇市の取締には躍起になるくせに、俺たち善良な市民が困ってる時には見て見ぬふりだとよ」

マスターは吐き捨てるようにそう言った。

その時、ドンっと大きな音がして店の奥にあるトイレのドアが勢い良く外側に開いた。

「あーあ、まざーれすちるどれんはさあぁ。あいつら子供さらうらしいよぉ」

ハルト達三人は一斉に振り返った。

「先生いたんですか！？」

ハルトとカジは声を揃えて叫んだ。

役立たずの黒服

その男はヤマサキという年齢不詳の男で、でっぷり太った体躯に顔は色白で丸々と膨れ上がっている。

見る者全てに西遊記に出て来る豚の怪物を連想させた。

先生というのはいわゆる愛称みたいなもので、実際に何の先生なのか知る者は誰もいなかった。

この店、東和食堂の常連の一人だ。

「ああ、すっかり忘れてた、先生はさあ、夕方きて、すぐにトイレに入ったきりだった、そろろろ三時間になるよ」

笑いながらマスターはいった。

「ヤマサキ先生、三時間もトイレの中で何やってたんですか？」

カジが言うと、

「うん、ボクは……　ちょっと、しぇいくすぴあの四大悲劇が……　何だったか急に思い出せなくなって……　ここのトイレ借りて考えていたんだよぉ」

ヤマサキは、レコーダーを遅回しで再生しているような喋り方でそういった。

「三時間も？　ずーっと？」

「うん」

ヤマサキは、頷くと、ニヤニヤと微笑みながら大きな金縁メガネを掛け直した。

そして真夏だというのに何故かしっかり着込んでいるステンカラーコートの襟を正した。

「まざーれすちるどれんは、さあ、汚染していない子供の臓器を闇ルートに売りさばいてるんだってよ」

ヤマサキはポケットから携帯電話を取り出すと液晶画面に表示されたネットニュースをハルトに見せた。

「マジかよ！　先生、じゃあ外の奴らここの子供たち狙ってるのかよ！」

カジが声を荒らげた。

「どうやら先生の言うことは間違いないみたいだ……」

ハルトは、携帯の画面から目を上げてマスターのほうを見た。

「マジかよ、ハル。やばいじゃん、うちの子供らが狙われてるってこと？」

「そうだね、可能性は高いね」ハルトがいった。

「冗談じゃない、子供達を殺されてたまるか！」

マスターは虚空に向かって大声で叫んだ。

「マスター、レイコさん達そろそろ戻る頃じゃない？」

ハルトが言うとマスターは青ざめた顔で

「そうだな、取りあえず黒服に電話だな」

そう言うとハルトから取り上げた携帯で９６２９番に電話した。

数回の呼び出し音の後、無常にも回線は一方的に切られてしまった。

「くそっ！　役立たずの黒服が！」

## Happy Birthday to You

「じゃーねー、ユイちゃんまたねー！」

「またねー、リカちゃん、ユウジくん」

ユイがリカとユウジに手を振る。

「バイバーイ、ユイちゃん、またテトリスやろうね！」

「うん、ユウジ君、絶対やろうね」

「今日は、子供たちがすっかりお世話になってすみません。
それにこんな素敵なお土産までいただいて」

リカのクラスメイトのユイの誕生日会。

帰り際、レイコはナカシマ家の玄関先で頭を下げた。

土産に貰ったのは、瓶詰めのキャビアと外国の有名店のものだというマカロン。

ナカシマ夫人のルミが有名服飾ブランドの紙袋に入れて持たせてくれた。

―――キャビアなんて食べたことがない

マカロンはさっき紅茶と一緒に出たので初めて食べたけどびっくりするほど美味しかった。

―――この世にこんな甘くて美味しいものがあるなんて

レイコは驚きと悲しみが混ざった気持ちになった。

―――こんなに美味しい物を毎日食べてるなんて

許せない。

次にレイコは怒りを覚えた。

「本当にすみません、こんな高価なものを……」

レイコはまた頭を下げる、そして自分の足元を見た。

履き古したスニーカー。

あちこち擦り切れててもうぼろぼろだった。

涙が出そうになった。

惨めだった。

「ああ、いーのよ。気にしなくて。それより今度お店にお邪魔するわね」

見送りに出たルミがレイコ達に微笑む。

「オタクのお店の唐揚げ定食、すごく美味しいって評判だから、ねえ」

ユミが隣で立つ夫に話しかける。

「うん、一回食べておかないとって、いつも二人で話してるんですよ」

ユイの父親、ナカシマが言った。

「あはは、そんなあ、評判だなんて。あんな定食、お口には合いませんよ」

―――社交辞令　ウチの定食なんて食べる気なんかないくせに

心の中でレイコは毒づいた。

噂には聞いていたがナカシマ家の暮らしぶりは、レイコの想像以上だった。

友愛党員の議員宿舎。

外見は普通のマンションだったが、一歩玄関の中に入った時からレイコは目を見張った。

豪華な調度品の数々。

最新の家電製品、ナカシマ夫人ルミの華やかな服装。

そして何よりレイコを驚かせたのがナカシマ家の贅沢な食生活だった。

―――こんなひどい時代だっていうのに、あんな贅沢な食材一体どこから入るんだろう

私たちは毎日売れ残った食堂の料理を食べて、その食べ物は汚染されてる。

子供たちは政府配給の安全だけど味気のない食事。

それに比べて、この人達は安全な上に信じられないようなおいしいものを毎日食べて暮らしている……。

そして健康で寿命だって全うして生きていくだろう。

レイコはあまりの理不尽さに涙がにじんだ。

ユイの父親ナカシマは、友愛党の幹部でこのネオシティ第一七居住区の顔役だ。

この国は過去十五年間、友愛党という政党の一党独裁政権下にある。

友愛党総裁はカモガミといい十五年間の長きに渡り政権を維持している

この国の最高指導者である。

カモガミは革命戦争の時の功労者だった。

当初カモガミの総裁就任時、報復攻撃があると分かっていながら
首都に先制攻撃を行った事で一部では痛烈な批判を浴びていた。

しかしカモガミは最高指導者の地位に就任してまず、食料の安定供給、失業者への
社会保障の確立などの政策を積極的に行なった。

この政策は当時、世界恐慌による凄まじい就職難と未曽有の食糧難に痛めつけられた国民に
絶大なる拍手喝采を持って受け入れられた。

カモガミはその後も卓越した政治手腕を発揮しこの国の復興に尽力すると、
いつしかこの国の歴代指導者の中でも最高の指導者だとの呼び声も聞こえてくるほどになった。

カモガミは法律を変え大統領と首相を統合した「総統」職を新設して自らそのポストにつき、
国民投票で是非を問うた。

賛成票は九十パーセントにのぼった。

こうしてカモガミ総統と友愛党の輝かしい時代が誕生したのだった。

絶大なる国民の支持によって誕生した友愛党政権だが、友愛党の政策は時代が進むにつれて
友愛党党員優先の差別的階級制度にシフトしていった。

友愛党の党員であるということはいつしか富の象徴となり、党員の暮らしは栄華を誇った。

この事で一般の貧しい国民は友愛党政治に対して強い不満と不信感を抱くようになっていくのだった。

友愛党員はこの国のエリートであってこの国の社会のあらゆる分野、
行政、立法、司法、軍、大衆組織におけるまで指導牽引していた。

友愛党員に成るためには厳格な審査があり一般の人は簡単にはなれない。

基本理念は民主的かつ文明的な国を建設する事とされたが、実際は極端な階級社会を形成して

いた。

友愛党員は、特権階級あつかいであらゆる面で優遇された。

例えば、海外から輸入された安全で贅沢な食料品が優先的に党員に配給される事などである。

特にそのことは、いまだに続く慢性的な食糧不足で未だ危険な食べ物
にしかありつけない庶民たちの強い反感を買っていた。

この国で健康的に長生きするためには僅かに輸入される安全な食物だけを摂取していくしかないのである。

それは一部の世界的大企業に務める家庭か友愛党員にしか許されてはいないのであった。

着信音がなった。

「失礼」ナカジマはスラックスのポケットから携帯をとりだし電話に出る。

「ああ、私だ。待ってくれ」

「すみません。仕事の電話です。ちょっと失礼します」

ナカシマは通話口をおさえてレイコに目礼すると、奥に消えた。

「こちらこそ、すっかり長居してすみません。二人共ちゃんとお礼を言いなさい！」

「はーい、ありがとうございました」

「ございましたー」

## 饒舌なるヨシオカの独白

「おう、オレだ。例の食堂のガキさらってこい」

「馬鹿野郎！　今すぐに行け」

「それと、今から一時間だけ黒服は動かねえ。
きっちり一時間だ。時間内なら少々派手にやっても構わん」

ヨシオカは携帯電話で今夜の標的を指示している。

「しかし、あの先生もひでえなあ、自分の娘の同級生だぜ、
やることがえげつない、極道以上だ」

ヨシオカは電話を切ると後部座席にふんぞり返り、
運転しているヤオ・ミンの背中向かって喋り続ける。

ヤオ・ミンは真っ直ぐ前を向き運転に集中している。

「全くひでえ時代になっちまったな……、
俺達ヤクザもんは殺し合いはやるが子供を殺す事はなかったぜ」

ヤオ・ミンの後頭部を睨みつけながらヨシオカの長広舌が始まる。

「ああ、お前の祖国の奴らは昔から金のためなら平気で女子供も殺るんだったな、なあヤオ」

ヤオ・ミンは相変わず無反応だ。

車は信号で停まった。

「まったく、お前らの民族には美意識ってもんがない」

ヨシオカはパワーウインドウのスイッチを押し窓を全開にすると
外に向かって痰を吐き出した。

ムッとする外気が車内に入ってきた。

「この車もお前の国で作ってるんだよな。
いい車だぜ。調度品としてもな。まあ、俺は大嫌いだけどな」

ヨシオカは革張りの後部シートを撫で回している。

「ヤオ、お前ぁ、大体なんでこんなしょぼい馬のクソみたいな堕ちぶれた国に来たんだ。
お前の祖国は、今や世界一の軍事力と経済力をもってやがるのに」

「そうか、そうだった、お前は変態野郎だったな。それでこの国に来た。
変態野郎にとってはこの国は天国だな」

ヨシオカが声を上げて笑う。

ヤオ・ミンの肩が揺れる。

「この街の奴らはみんな遊んで暮らしてる。
そりゃ働かなくても飯がくえりゃ、働かねえよな。
でもなあ、昔は働きもんだったんだぜ、
この国の人間は」

「働きすぎで死ぬくらいにな。
結婚してガキつくってまた働いて、ちっぽけな家買ってそれで幸せだって、
笑うよなあ」

「今はどいつもこいつも死んだような目してるだろ、
働かなくても飯は食える。おまんまの心配はない。
でもそれだけ、それ以上はない。そして五十前にくたばるのさ。
笑うよな。そんなん受け入れて生きてるって。
まったく今も昔も馬鹿野郎ばかりだ、この国は」

「この国で、旨いもん腹いっぱい食って、
いい女とヤリまくって長生きしたいなら、
友愛党に入るかヤクザもんになるしかないんだぜ」

---

「究極の二択だ、ウケるよな。どっちがいいか。

そりゃあ、友愛党員がいいに決まってるよな。
普通。でも簡単にはなれねえ、世襲でなるやつは別だけどな。
親が党員っていうのがベスト。
途中からなろうとするとなら、よっぽど頭が良くて学者になるか、
勉強して医者か弁護士になるか。
努力して政府の機関に就職するか。
天才的スポーツ選手になるか。なれないって。
そんなの普通よぉ。だろ？」

ヨシオカはスーツの内ポケットから煙草を一本抜いて口にくわえ、いやらしく輝く金無垢のライターで火を着けた。

「だから、今のガキはヤクザになりたがる。今や人気職業のナンバーワンだ。
女たちはヤクザの愛人になりたがる。
もてるぜぇ、ヤクザは。いい服着て、いい車乗って、いいもん食って、
いい酒のんで最高の女といいマンションに住む」

「だけどこっちも簡単にはなれねぇ、やっぱ才能ってやつがあるんよ。
ヤクザにも。まあ馬鹿じゃあなれない。
ここは一緒。はなからサラリーマンやってるようなヤツには到底無理、
ヤクザは自分で稼がなきゃな、でも今はシノギあげるの楽じゃない。
この世界でのし上がって行くには天才的な何かが必要なのさ……、
馬鹿でなれず、利口でなれず、中途半端じゃなおなれず。
それが侠客ってな、まあいいか、お前には関係のない話だ……」

ネオシティの街をヨシオカ達を載せた黒い電動高級セダンが走り抜けた。

カーラジオから古いジャズが流れている。

寂しげなテナーサックスの音。

「しかし今年はやけに暑いよなあ。
全く、こんな体裁だけで中身のない張りぼての街つくりやがるから、
あちこちから馬鹿どもが湧いてきて暑苦しくてしょうがねえ」

「みんなくたばりゃいいのになあ……」

「殺したいか？　ヤオ。みんなブッ殺したいか？
殺っちまっていいぜ」

「―――この街の奴ら皆殺しにしてくれよ」

## 雪の日の惨劇

ケンイチは母親を殺害して家を出たあとしばらくあたりをうろついた。

昨日からの雪は一向にやむ気配がなく、

寝巻き代わりのトレーナーシャツ一枚のケンイチは今にも凍えそうだった。

何処にも行くあてはなかったし戻る家もなかった。

数時間が経ってケンイチは気がつくと結局自分の通う小学校の正門の前に立っていた。

冬休みの校庭には雪が降り積もってグラウンドは一面の銀世界であった。

眩しいほど真っ白な風景の中での数人の子供たちが、雪合戦に興じていた。

ケンイチのクラスメイト達だった。

歓声を上げて楽しそうに雪玉を投げ合うクラスメイト達をケンイチはバックネット裏から眺めた。

一人の少年がケンイチを見つけた。

そして薄着のケンイチを見て指差し声をあげて笑った。

―――こいよ、一緒に雪合戦やろう

ケンイチは誘われるがままにグラウンドに入った。

皆は一斉に雪玉をケンイチに投げつけた。

すぐにケンイチは雪まみれになった。

五、六人の少年たちから笑い声が上がる。

逃げ回るケンイチ、面白がって追いかける少年達。

逃げながら校舎の方へ走っていくと雪下の花壇の柵に足を取られてケンイチは転倒した。

その時リーダー格の一際体格のよい少年が投げた雪球がケンイチの顔面に勢いよく当たった。

強い衝撃を受けてケンイチの額がぱっくりと割れた。

その雪球には子供の拳大の石が詰めってあったのだ。

ぼたぼたと血が流れた。

寒さのせいか痛みはほとんど感じなかった。

ケンイチは雪の上に点々と落ちた自分の血を見た。

血の色が金魚になった。

ケンイチが握りつぶして殺した———母親が大事にしていたあの赤い金魚だ。

金魚は雪の上から抜け出すとケンイチを馬鹿にするようにひらりと舞い、ぱちんとはじけて空中に消えた。

その瞬間今までに感じたことのない激しい怒りがケンイチを支配した。

身体の中のトカゲが暴れだす。

ケンイチは雪玉を投げつけた少年を睨みつけた。

その視線は強い憎悪に満ちていた。

少年が叫びながら走ってきてケンイチにつかみかかった。

———なんだその目つきは、お前なんか死ねばいいんだ

そういいながら少年はケンイチを殴りつけた。

何度も何度も殴った。

殴られて花壇の中に倒れこんだケンイチの指先に雪の中の何か硬い物が触れた。

用務員が片付け忘れた園芸用のスコップが雪の中に埋もれていたのだ。

少年が倒れているケンイチに再び襲いかかる。

―――死ね！　お前なんて生きていてもしょうがないんだ！

その手には雪玉に詰めてあった石が握られていた。

少年は石を掴んだ腕をケンイチの顔めがけて手加減なしに振り下ろした。

ケンイチはそれを間一髪で避けると握り締めたスコップを少年の顔めがけて渾身の力で突き出した。

スコップの先端部分は少年の右目に深く突き刺さりその眼球をえぐった。

真白の世界に鮮血が飛び散り、返り血がケンイチの視界を真っ赤に染めた。

# ゼンタイシュギシャ？

「ねぇーマァマァー、ユイちゃんちのバースデーケーキすっごくおいしかったねー」

リカが楽しそうにレイコに話しかけた。

レイコ達親子は、月のない夜道を三人並んで家路を急いでいた。

リカは今年十歳になった。

最近はすっかり生意気になって、何気ない会話をしてるつもりが時々レイコを驚かせる事を言う。

「そうねえ、本当に美味しかったね」

リカの手を握りながらレイコが言った。

「リカ、また食べたいよぉー」

「ユージもたべたい！　たべたい！」

弟のユウジがピョンピョンと跳ねながら叫ぶ。

ユウジは七歳。

まだまだ幼い。

可愛いさかりである。

「はいはい、また来年ね、ユイちゃんのお誕生日に食べれるよ」

「えー、一年なんて待てないよー」

「ユージもまてないー、明日食べたい！」

「もう、二人ともわがまま言うんじゃありません！」

今日はやけに蒸し暑い。

空はどんよりと曇っていた。

すっかり長居してしまった。

天気予報は夜半に雨になると言っていた。

早く帰らないと、雨に降られたら大変だ。

一応傘は持ってはきた。

でも放射性物質を多く含んだ雨の中、子供連れで歩くのはまっぴらだった。

「ねー、どうしてユイちゃんのおウチはあんなにおいしいものがあるの？」

「それはねえ、ユイちゃんのパパは友愛党の幹部だからよ」

「ねー、ユーアイトウっておいしい？　カンブってなに？」

ユウジがレイコに向かっていった。

レイコは思わず吹き出してしまった。

「ばかだね、ユージは、友愛党は食べ物じゃないってばっ」

リカは、ユウジの頭を小突いた。

ユウジは大げさに頭を押させてうずくまった。

「いたいよーー、ママー、リカがなぐったよ」

「んでさぁー、あんなケーキとか果物とかお肉とかあったじゃん、あれって毒が入ってないの？」

「うん、ユイちゃんちのは大丈夫だよ」

「でもさあ、うちのお店の料理は毒が入ってるんでしょ？」

「そうよ、だから絶対食べちゃダメ、あなた達は安全クッキーと健康ミルクでいいでしょ」

「だって、まずいんだもん。超まずい」

だから、ユイちゃんちのお誕生会は行きたくなかったんだ。

レイコは、多分こうなるだろうと思っていた。

「でも、お店のお客さんは食べてるよ、パパのお料理」

「あれはねえ、大人にしか出してないからいいのよ。大人はもう体に毒が入っちゃってるからいいの」

「ずるいよー」

「それにカジさんとかヤマサキ先生が食べるだけだし、いいのよ。あの人達ならどうなっても」

レイコは、ちょっと言いすぎてしまった事に気づいたがもう遅かった。

「じゃあ、さー。ハルちゃんもいいの？」

「うーん、そうだねぇ、ハルちゃんには食べてほしくないなぁ、ママも」

「ふーん、でもハルちゃんも食べてるよ、それもおいしそうにさ」

「うーん……ハルちゃんも、もう子供じゃないから、いいのよ」

―――ハルちゃんは確か十八歳のはず

もちろん友愛党政府が十年前に施行した児童安全育成法の施行前に生まれている。

児童安全育成法が発令された以降に生まれた子供達には政府が汚染されてない安全な食事を保証

している。

児童安全育成法とは――

将来のある子供達の生命を守り我々国民の共有財産として大事に後世に命を繋いでいこう。

という理念に基づき交付された法令でその年に生まれた新生児から授乳時期には
母乳は禁止され政府配給の安全な粉ミルクが支給された。

離乳食以降も政府が安全な食べ物を継続して提供してくれる。

リカとユウジは学校で給食を食べているがそれは質素だが栄養のバランスが考えられ、
安全な食材で作られた食事である。

児童安全育成法設立以降に生まれた子供は一応安全世代だと言うことになっている。

このまま汚染されてない食事をとり続ければ、
八十歳くらいまでは生きれるという厚生保険局の試算が発表されている。

---

「うちも友愛党にはいろうよ」

「簡単に入れないんだから。だって仕方が無いじゃない、ウチは違うんだから、ユイちゃんちとは」

「ねー、ユーアイトウっておいしいの？」ユウジがまた聞いた。

「バカ、友愛党はこの国の政権政党だよ」

「リカ、誰からそんなこと教えてもらったの？」

「ユウタ君だよ、学校で聞いたの」

「もー、ユウタ君と仲良くしないでっていってるじゃないの」

ユウタは、リカと同じクラスの男の子で少し変わった子である。

まだ小学五年生なのにすごくませた事を話す。

「分かってるよ、そんなに仲良くしてないってば、ただお話しただけ」

「どんな？」

「えーっとねー、ユイちゃんちのパパはゼンタイシュギシャなんだって、
そのゼンタイシュギのせいで私たちは自由をハクダツされてるって、
だからすごい悪い人なんだってー」

「リカ今のお話誰かにした？」

レイコは立ち止まってリカの肩に手をおいて聞いた。

「ううん、誰にも話したことないよ、今はじめてママに話したんだよ」

「そう、それはよかった……。いい、絶対その話は誰にも言っちゃダメよ！」

「どうして？」

「そんなこと言ってると黒服さんに連れていかれるからよ！」

## レイコさんに電話しないと

「マスター、レイコさんに早く電話しないと」

呆然としているマスターにハルトがいった。

「ああ、そうだな、レイコのケイタイに電話してみよう」

マスターは、ヤマサキに携帯を返すと、
カウンターの奥に入り自分の携帯でレイコに電話した。

「もしもし、オレだよ、今どこにいる？」

「ああ、ごめん、遅くなって。そうねえ、もう少しで駅前。
あと十分くらいで帰りつくと思うわ」

「待て、まだ帰ってくるな！」

「どうしたのパパ？　急に」

「いや、今は理由を話してる暇がない。取りあえず駅で待っててくれ。
すぐに迎えにいくから」

「一体なんなの？　もう、なんだか分かんないけど、いいわ。
じゃあ、駅前広場の噴水のところで待ってるね」

「わかった、車ですぐに行くから絶対そこを動かないでくれよ」

マスターは電話を切ると、壁の時計を見上げた。

午後九時二四分。

「マスター、オレも一緒に行くよ」

「うん、わかったハル。ごめん悪いけど、付いてきてくれ」

マスターはジーンズの尻のポケットから車のキーを取り出しながら、

「カジさんと先生は留守番たのみます」

「わかったよ、マスター、気をつけて。オレは先生と店番しとくよ、
どうせ客来ないだろうけど、ねえ先生？」

「うん、るすばんしとくよ、ちょっとトイレに行ってから」

「またですか？　先生…… 頼みますよ」

ヤマサキはトイレに入ってしまった。

「じゃあ、ごめんカジさん、すぐに戻るから、
棚のボトルは適当に飲んでていいよ」

## お前、お袋殺したんだってな？

母親を殺害しクラスメイトの少年に重傷を
負わせた罪でケンイチは逮捕された。

ケンイチは、当局による数週間の取調べを経て家庭裁判所の
審判を受けた後、保護処分として地元から遠く離れた児童更生施設
『国立のぞみの園学院』に送致された。

ここでは、政府発行の『重犯罪児童再教育プログラム』を遂行し管理
されていて、重犯罪を犯した小中学生の少年少女が収容されている。

『国立のぞみの園学院』の方針は、院生の更正、矯正および社会復帰のため、
家庭的な雰囲気で成長を促進させ、訓練し教育する
事を目的とするとされていた。

しかしそれは全くの表向きであり、
実際の院生の生活は悲惨極まりないものであった。

職員による子供たちに対する体罰は日常的であり
、食事も汚染された食材で作られた料理が平然と出されていた。

当時院生はハルトを含め四人でその内、少年が三名、少女が一名であった。

皆、殺人の罪を背負ってここに送致されてきた子供たちである。

凶行に至った理由はそれぞれであったが、院生五人に共通するのは、
親の愛情を全く受けずに育ったという事であった。

院長はカリヤといった。

宗教家でもあるカリヤは院生に自分の事を牧師様と呼ばせていた。

カリヤは五十代後半であったが、顔の色艶は良く見るからに健康そうであった。

背は低く腹が出て太っていた。

牧師といっても服装はいつも普通の会社員が着るようなスーツ姿あった。

ケンイチは、ここに到着してまず最初の手続きを済ますとアライという
三十代の施設職員にバリカンで坊主にされた。

アライは体格の良い大男で半袖のシャツから出る日に焼けた
その腕は太く毛深かった。

「お前、お袋殺したんだってな？」

刈られた毛を掃除させられてるケンイチに向かってアライがいった。

「……」

「どんな気分なんだ？　自分のお袋を絞め殺すときは？」

「……」

「何とかいえよ、お前、しゃべれねえのか？」

アライは、ケンイチの耳を掴むと力まかせに引っ張りあげた。

「痛いか？　何とかいえよ、オレを舐めるなよ！」

「……」

「強情なやつだな」

そういうとアライは、いきなりケンイチのみぞおちを殴りつけた。

ケンイチあまりの痛みで息が出来なかった。

たまらずうずくまり体を折って床に反吐を吐いた。

それからケンイチは保健室と呼ばれている独房に手錠とヘッドギア、
拘束衣をかけられて二週間入れられた。

それは、新入りの収容者に課せられるここでの儀式であり
この施設の習慣であった。

これは新参の収容者の毒気を抜く事が目的の隔離であった。

院長のカリヤはここで静かに瞑想し自分の犯した罪の反省を
する事をケンイチに命じた。

一人部屋の中、拘束されながら、ケンイチは母親の事を思った。
傷つけた少年の事を。

幼い頃の事を思った。

楽しい思い出などひとつもなかった。

悲しかった事は数え切れない程あった。
ずっと一人だった。孤独だった。

暴力以外で人と繋がった事はなかった。

母親でさえもそうだった。

生まれてきた事を悔やんだ。

でもどうしようもなかった。

何故なのか？

何のため生まれてきたのか？

未来は？

雪の中に現れた金魚、

それを見たときの抑えきれない憤怒、暴力衝動。

身体の中に入り込んで同化してしまったトカゲ。

考えても何ひとつわからなかった。

ただ空っぽになりたかった。

透明になりたかった。

そしてこの世界から消えてなくなればいいと思った。

---

保健室から出されて数週間が過ぎた、
ケンイチは相変わらず誰とも喋らない日々が続いていた。

あれからアライはケンイチに絡んでくることはなかった。
ケンイチにとって穏やかな日々だった。

その日、昼食後の自由時間、窓の外の景色を一人ぼんやりと眺めているケンイチ。

その背後から少女が話しかけてきた。

「何みてんの？」

ケンイチは窓の外を見つめたまま振り向きもしない。

背中では平静を装っていたが内心は動揺していた。

通っていた小学校では、ケンイチに話しかけてくる子供なんて
誰もいなかったからだ。

「あんたまじ、口利けんの？」

少女は、怒ったようにいうと、おどけてボクシングを真似た
格好でケンイチの背中を軽く殴った。

ケンイチは、振り返り少女を見た。

「ヤメロ……」不意の問いかけにためらいは隠し切れず、
ケンイチはやっとで答えた。

「なんだ、ちゃんとしゃべれるやん！」

少女はけらけらと笑いながら、
「ケンイチっていい名前やね」といった。

「……」

「今日はあったかくて、気持ちいい―――」

少女は、ケンイチの肩越しに眩しそうな目をして窓から見える晴れ渡った空を見ている。

振り返りケンイチも窓の外を見る。何もない田舎の風景、
南の方角のこないだまで雪化粧だった山に日が当たり緑が美しく輝いていた。

春が近づいていた。二人はしばらく並んだまま黙って外の景色を見ていた。

少女の名は、アユミといった。

## 追跡されてる？

「じゃあ、裏口から出るぞ、ハル」

「うん、わかった」

マスターとハルトは、店の裏口から出ると店の裏に駐車してあった
古い型のライトバンに乗り込んだ。

「エアコン壊れてっから、ちょっと暑いけど我慢な」

マスターはイグニッションキーを捻ってエンジンを掛けようとするが、
セルモーターが弱々しく唸るだけでなかなかエンジンが始動しない。

「くっそー、バッテリーが弱ってるみたいだ、
こんな時に限って……、たのむ、掛かってくれ」

ハンドルに頭を付け祈るようにマスターはキーを廻している。

四回目にしてやっとエンジンが掛かった。車内に排気音が響いた。

「よし、掛かったぞ」

マスターはアクセルを踏み込んで車を発車させた。

ライトバンは後輪を軽くホイルスピンさせながら通りに飛び出した。

ダクトを通して排気ガスの臭いが車内に流れこむ。

「マスター、これガソリン車なの？」

「いや、ディーゼル車、ボロ車だけど仕入れの買出しには重宝するからね」

窓を開けながらマスターが答える。

「それに重油だったら海岸行けばバケツでくみ放題じゃん、

燃料代かからないからね」

「流出した重油使ってんの？」

「そうだよ」

ハルトはしきりに後方を気にしてる。

「アイツら気付いたかな」

「どうやら付いて来るみたいだぞ」

マスターはルームミラーに映る三台のバイクと一台の黒いワンボックスカーの影を確認した。

「バイクに三人、後ろのワンボックスには何人か乗ってるだろうな」

国道の大通りに出るとマスターはスピードを上げた。

「結構大人数みたいだね、何か武器になるものない？」

ハルトが訊く。

---

「うーん、武器ねえ。あ、そうだ後ろの座席の下に金属バットならあるぞ。
日曜日にユウジに野球教えてやるって約束したから乗せてたんだった」

「一応、用意しとくね」

ハルトは体を捻って後部座席の足元にある金属バットを取って膝の上に置いた。

「マスター野球やってたの？」

「ああ、昔な。結構うまかったんだぜ、四番バッターだった」

「へえ、意外だね」

「そうかあ？　ハルトはやったことないのか、野球？」

「うん……、やったことないなあ」

「じゃあ、今度教えてやるよ。ユウジと一緒に鍛えてやる」

「うん、楽しそうだね」

先頭のバイクには、先程のサングラスの青年が乗っていた。

ヘルメットは被らず長髪を風になびかせながら運転する姿はハルトと変わらない位の年齢に見える。

後ろにはまだ幼さの残る顔立ちの少年が続いてる。

バイクは三台ともエアロフォルムの体を包みこむようなフルカウルデザイン、外国製の最新型だ。

両輪駆動でホイールベースが長く、寝そべるような姿勢で運転している。

モーターは大型のモーターに改造してあるようで甲高いモーター音を辺りに響かせていた。

集団はマスターの運転するライトバンの後ろを一定の距離を保ちながら追走している。

午後九時半の街は全く人気がなく静まり返っている。

この街を中心を縦断して伸びるこの幹線道路はすでに営業中の店舗もなく街灯と疎らに走る車のヘッドライトが交錯するだけだった。

「でもさあ、おかしいよね。あちこちで子どもがさらわれる事件が起こってるっていうのに、黒服の奴ら何やってるんだろう……」

「ああ、まるで動いてないみたいだな、テレビのニュースでもやってなかったし」

「自分たちのことは自分で守れってことか」

「ケイタイのニュースだけだ。あれ、もうあのニュース消えてるよ」

ハルトが携帯電話を見ながら言った。

「え、おかしいだろ。さっきまで見れたじゃん」

「うん、さっきのページは削除されてる」

「どうなってるんだ全く。さっぱりわかんねえな」

## 駅のロータリー

「パパが迎えに来るの？」

リカが不思議そうに聞く。

「そうみたい」

「なんで？ お店あるのに」

「わからない」

「あ、パパ来たよ！」リカが指差す。

マスターたちが乗ったライトバンが駅のロータリーに入ってきた。

レイコたちの間近で急停車するライトバン。

「早く乗るんだ！」

車窓から首を出しと叫ぶマスター。

「あ、ハルちゃんも一緒だ」

ユウジがはしゃぐ。

「どうしたの。血相変えて」

「何でもいいから、早く！」

レイコと子供たちはあわてて後部座席に乗り込んだ。

ラッシュの時間が過ぎた駅の構内は、家路を急ぐ人たちが数人いるだけで閑散としていた。

---

追跡してきた集団もロータリーに着くとライトバンを取り囲むように停車した。

ライトバンの前後に少年二人のバイクが停まり、ワンボックスカーは
後方に少し距離を置いて停車している。

「どうするマスター？」

「うん、奴らもここじゃあ手が出せないだろ」

「一体なんなの……」レイコが怯えた様子でいう。

「わからん、でも心配しなくていい」

子供たちは、ただならぬ様子を感じてじっと黙っている。

サングラスの男のバイクがライトバンの右側に並んで停まった。

「一体、俺達に何の用があるんだ！」

マスターは運転席の窓からサングラスの男に向かって叫んだ。

サングラスの男はバイクに股がったまま、無言で静かにマスターを見下ろしている。

## ユキオとエミコ

「ヒラヤマの兄貴何やってるんだろ、早くさらっちゃえばいいのに」

ワンボックスカーの助手席、少女が退屈そうに前方のやりとりを見ている。

「うるさい、オマエは黙ってろ！」
運転席の青年がいう。

「ああいう仲のいい家族見てるとムカつく」エミコがいう。

「お前も相当親にやられたのか？」

「うん、ウチの家は最低だったよ、両親揃ってギャクタイ親。
口じゃ言えないくらい酷いことされたよ。
それで、逃げて来ちゃった。このままじゃあ、いつか絶対殺されるって思ってたし。
うちらはみんなそうじゃない？　ユキオんとこは違うの？」

「俺んとこは実はそうでもない。お袋の事は嫌いじゃなかった」

「そう、可愛がられて育ったんだ？」

「そんなわけ無いだろ、ただ嫌いじゃないだけだ」

「じゃあ、なんでこんな事やってんの？」

「そりゃあ、俺は頭良くないし真面目にやってもろくな人生に
ならないからに決まってるだろ」

「それでヤクザになっていい暮らしがしたいわけ？　甘いわ、そんなん」

「うるさい、これ以上しゃべるな！」

「ヒラヤマの兄貴、兄貴ってユキオ言うけど、年変わんないでしょ？」

「うるさい、アニキは兄貴だ！」

「尊敬してんだ？　ヒラヤマの事」

「呼び捨てにするな」

「ヒラヤマに犯（やら）れたんだ……」

「いつだ？」

「三日前の夜、マーキーのトイレで、ヒラヤマかなりガンジャと
酒で出来上がってて、無理やり―――」

「……」

「殺されるかと思ったよ、酷く殴られて、首絞められて―――。
腕に噛み付いてやっと逃げたけど、きっと殺すつもりだった、
あたしを、アイツ狂ってるよ」

ユキオは黙ったまま窓の外を見ている。

空調の効いた車内、ユキオの額から汗がにじむ。

雨が降りだした、雨粒がフロントガラスをポツリ、ポツリと叩いている。

「―――ヒラヤマ殺ってよ、ユキオ」

## アユミの過去

アユミはケンイチより二つ年かさだった。

アユミは父親を殺した罪で一年ほど前にここ、
『国立のぞみの園学院』に送致された。

父親はどうしようもないギャンブル狂で地元のヤクザの開帳する
裏カジノの常連であった。

職業はタクシーの運転手であったが、家に生活費を入れる事はなく
給料のほとんどは博打に消えた。

それどころか借金を繰り返し、アユミ達一家は絶えず闇金の取り立てに
追い回されるような日々を送っていた。

アユミの母親はそんな夫に愛想をつかし、アユミを残して他の男と町を出て行ってしまった。

アユミが小学五年生の時の出来事であった。

大好きだった母親が去って、アユミは毎日泣いて過ごした。

『はやくお母さんが帰ってきますように……』

アユミは毎晩必ず寝る前にそう神様に祈った。

---

母親が出て行った頃から父親はアユミに暴力をふるうようになった。

父親は博打に負けて帰ってくるとそのうっ憤を晴らすがごとくアユミ
に殴る蹴るの暴行を加えた。

―――お前なんか生まれてこなければよかった

殴りながら母親が出て行ったのは全てアユミが悪いからだとなじった。

アユミのまだ幼く華奢なその身体には生傷が絶えることはなかった。

アユミは何度も家出を繰り返したが、父親は執拗に見つけ出すと
否応なしに連れ戻した。

『逃げ出そうなんて考えても無駄だ』

父親にそういわれると、アユミは慄然とし、生まれてきたことを後悔した。

アユミが中学にあがると父親の性的な虐待が始まった。

この頃から父親は大酒を飲むようになり、酔っては無理やりアユミを犯した。

最初は激しく抵抗していたアユミも徐々に逆らう気力を失い、
父の行為を虚ろに受け入れるようになっていった。

やがて父親は、仕事にも行かなくなり毎日昼間から酒を飲んで過ごす
ようになった。

そして夜になると博打に出かけた。

少しでも気に入らないことがあれば、激昂してアユミを殴った。

殴り疲れるとアユミを抱いて寝た。

父親は金がなくなるとアユミに『体を売って金を作って来い』といい、
博打仲間にアユミを売った。

---

アユミにとって地獄のような毎日が続いた。

いくら待っても母親が戻る兆しはなかった。

母の帰りを神に祈る事はとっくに止めてしまった。

かわりに毎夜眠りに落ちる時、どうかこのまま朝が来ませんようにと念じるようになった。

だが、朝はやって来た。絶望とともに。

毎朝アユミはあまりにも無慈悲な神を呪った。

やり場のない呪詛はいつしか父親に対する殺意に変貌を遂げていった。

アユミは父親を殺して自分も死のうと決心した。

その日は、朝から強い寒波が押し寄せて底冷えする夜だった。

父親は、深夜に帰ってきた。

珍しく博打で大勝したらしく酒に酔って上機嫌だった。

家にあがると父親は、寒い寒い、といいながら外套も取らず居間の石油ストーブの前にかじりついた。

しばらくすると適度に暖まったのか、ストーブの前で父親は大いびきをかき始めた。

それを見て、アユミは、庭においてあった灯油のポリタンクを運び込むと居間に灯油をまいた。

すっかり寝込んだ父親のコートの背中にもたっぷり灯油をしみ込ませると
ライターで新聞紙に火をつけ灯油で濡れた床にそれを投げた。

炎はまるで大蛇が地面這うように床の上をゆらゆらと広がっていった。

燃え上がる大蛇は灯油の跡をくねくねと辿りながらようやく父親のコートに達した。

しっかり灯油を含んだ厚手の繊維は思わぬほど勢いよく燃え上がった。

あまりの熱さに驚いて父親は目を覚ました。

父親は飛び上がるように立ち上がって振り返えるとアユミのほうを向いた。

そして自分の置かれている状況に気がつく間もなく、その激しい業火の責め苦に断末魔の叫び声

をあげた。

勢いよく燃え上がる父親に向かってアユミは『ザマアァーミロ！』と何度も叫んだ。

父親の口が動いて何か言いかけたように見えたがそれは瞬く間に一本の火柱と化した。

ここで父親と一緒に死のうと思っていたアユミだが、だんだんと燃え広がる炎の勢いに怖気づき逃げ出したのであった。

アユミと父親が暮らす古い木造の家は全焼だった。

翌朝焼け跡の中、父親は焼死体で発見された。

そして消防隊の実況見分の下、家の床下からは刺殺された二体の遺体がでてきた。

二年前に家を出たはずのアユミの母親とその情夫の白骨死体であった。

アユミは焼け落ちた家の前、大勢の野次馬のなかで呆然と立ち尽くしているところを逮捕された。

「全員おりろ」

ヒラヤマは短くいった。

「うるせえ！　俺たちにいったい何の用があるんだ！」

マスターが怒鳴る。

互いに沈黙のしたままの数十秒が過ぎた。

雨粒がアスファルトの路面に吸い込まれていく時の匂いがした。

ヒラヤマはキルスイッチでモーターの電源を切り、左足でサイドスタンドを蹴りだすとゆっくりとバイクを降りた。

着くずしたカーキのフィールドジャケット、迷彩のカーゴパンツ。身長は二メートル近くある。

一連の動作はしなやかで、その姿は野生動物それも肉食系特有の獰猛さと比類ない威圧感をまとっていた。

悠然とライトバンの横に立ったかと思うと、次の瞬間ヒラヤマは凄まじい勢いでに運転席側のドアを蹴り上げた。

鈍い金属音が辺りに轟きわたる。

つま先に鋼鉄のプレートが埋め込まれたスチールトゥブーツの強烈な一撃で
ライトバンのドアはべっこりとへこむ。

強い衝撃を受けライトバンは大きく揺れた、車内にレイコの悲鳴が響く、ユウジは激しく
泣き叫び、リカは真っ青な顔でレイコにしがみついて震えている。

ヒラヤマ無言のまま、さらに続けて蹴りを入れる、二発、三発、四発、
間髪入れずに左の前蹴りと横蹴りのコンビネーションを入れ続ける。

あっという間に運転席側のドアは大破し無残にへしゃげていく。

六発目、ドアのロックピンがはじけ飛び、八発目の横蹴りでサイドウィンドウが割れた。

粉々になったガラスの破片が辺りに飛散る。

ヒラヤマは黙々と蹴り続ける。

助手席のドアを開け、ハルトがライトバンから飛び出してきた。

「やめろ！」ハルトがヒラヤマに向かって叫ぶ、それを無視して無言でドアを
蹴り続けるヒラヤマ、ハルトは助手席の金属バットを握って駈け出した。

ハルトはヒラヤマの背後に回り金属バットを大上段に構えると、
「いい加減にしろ！」と叫びながら振り下ろした。

ヒラヤマはやにわに半回転して足を突き出すと同時に踵でハルトの腰を強く蹴った。

何の躊躇もなかった、激しい衝撃と痛みが走った、ハルトは吹っ飛びそのまま後方へ倒れこむ、
投げ出された金属バットが雨で濡れたアスファルトの路面にカラカラと音を立てながら転がっていく。

ヒラヤマがゆっくりと倒れているハルトに向かっていく。

その時車からマスターが飛び出し「っざけんなこの野郎！」と叫びながらヒラヤマに掴みかかった。

次の瞬間、ヒラヤマの強烈な肘打ちがマスターの顔面を打ち据えた。

堪らず崩れ落ちるマスターの腹部に今度は容赦無いヒラヤマの蹴りがはいる、
マスターは、後ろに吹っ飛んだ、その勢いでライトバンのボディに激しく叩きつけられ崩れ落ちるように倒れこんだ。

ハルトは起き上がりヒラヤマに飛びかかろうとした、その時ライトバンの
前方にいた金髪の少年が掴みかかる、二人はもつれて横倒しになる。

金髪がハルトに馬乗りになって押さえつけようとした瞬間、ハルトの右拳が金髪の顔面を捉えた

。

金髪は顔をおさえてしゃがみ込んだ。

起き上がろうとしたハルトの背中に後方にいたもう一人の少年が躊躇なしの飛び蹴りを食らわせた、たまらずハルトも前のめりにつんのめって倒れこむ。

金髪がゆっくりと立ち上がって落ちていた金属バットを拾いあげると「死にやがれ！」といいながら倒れているハルトの後頭部にそれを打ち付けた。

―――遠雷の音が響き、雨が激しくなった

―――ハルトの意識が急速に遠のいていく

一気に温度が下がった路面がその場に横たわるハルトの体温を奪っていった。

## その街はネオシティ

この国の新政府が樹立され幾許かの時が流れた。

壊滅してしまったかつての首都に変わり新首都が制定された。

厳しい内乱の末、比較的放射能汚染の少ない場所に作られた未成熟なメトロポリス。

ある種いびつでエキセントリックな様相を呈したその街はネオシティと呼ばれた。

人口一千万人、二十一の居住区で構成されている新首都ネオシティは、事実上この国最大の都市になった。

この国は友愛党の一党独裁制の下でネオシティを中心とした都市国家としての再出発を果たしたのだった。

復興作業は新政府の主導により急ピッチで進められた。

それによりネオシティは飛躍的に発展し数年後、中心部や都心には高層ビルが建ち並ぶまでになった。

ネオシティは、この国なかで唯一華やかな賑わいを見せる市民都市として、外部で暮らす人々の憧れの都となった。

この街に暮らす友愛党員には手厚い保証があり、それ以外の市民にも政府によって最低限の生活が保証された。

---

しかしネオシティ外部には自給自足で暮らす多くの貧しい国民が住んでいる。

そこでは最悪の経済状況のなか、食料も著しく不足、栄養失調どころか、
餓死者で溢れる有り様であった。

満足な食糧が無ければ人口は養えない。今や全ての国民に行き渡る食糧は
この国に残されてはいなかった。

政府は外の土地に住む国民の悲痛な叫びを無視して首都ネオシティ一極集中
体制を貫いた。

最高権力者であるカモガミはネオシティ以外に住む国民を非情にも切り捨てたのだった。

抑圧的な政府の不平等政策に当然外の土地に住む国民の怒りは爆発、暴動が頻発した。

そして友愛党のある有力議員が反政府のテロリストに暗殺された。

それ事件を機にしてカモガミはネオシティ以外の土地を放射能汚染地区と指定した。

汚染地区に暮らす者には一切の行政サービスは行わないという極端な差別政策を施行したのだった。

ネオシティには暴徒による攻撃を防ぐため周囲に高さ約八メートルに及ぶ厳重な要塞壁が張り巡らされた。

これによりネオシティは外部と完全に分断され人々の自由な行き来は実質不可能になった。

東西には外部とつながる二つのゲートが存在した。

そこにはそれぞれ武装した政府軍のゲートキーパーが二十四時間体制で監視している。

『射殺許可法』が制定されて以降、外部からゲートに近づく者は不法侵入者として即座に射殺された。

それでもネオシティを目指すものは年間に数千人を数えた。

突然乾いた銃声が響いた。

西ゲート前にたむろしていた数人の男達が散り散りに逃げ出した。

「畜生、外れやがった」

望楼の上で兵士が悔しそうに呟いた。

「下手くそが」

もう一人の兵士が楽しそうに笑った。

「うるさい、今度は仕留めてやるぞ」

撃ち損じた兵士は悔しそうにそう言うとつばを吐いて顔を背けた。

望楼の上から眺めるとゲートの外側には幅の広い道路が西に向かって真っ直ぐに伸びていた。

道路は壁門の手前で分かれていて分岐した道路は物資運搬車両用の地下通路に続いている。

通路はネオシティに搬入される物資を積載したトラックだけが通行を許可されていた。

今の時間は完全に封鎖されていて通行する車両は今は一台もいない。

西に伸びる道路の両側には人工的に植林された森が広がっている。

樹々は錆びた鉄のように赤茶けた枝葉を広げ汚染し荒廃した地表を覆い尽くしていた。

赤い樹林が果てしなく続く光景は異様であったが、錆びついた森は一種神秘的な美しさを放ち見るものを圧倒した。

「今夜はやけに多いな」

「ああ、そうだな。くそ忌々しい奴らだ全く」

「これで明日の昼飯はお前のおごりだからな」

「まだ交代まで時間がある。逆転してやるからな」

新首都ネオシティは世界各国から友愛党カモガミが作り上げた完全なる要塞都市として認識されていた。

ネオシティの中心であり行政区の中央区には復興のシンボルとしてフレンドシップスクエアと呼ばれる広場が建設された。

フレンドシップスクエアでは、毎年立党記念日に、友愛党の党大会と盛大な軍事パレードが開催される。

十万人規模のこの大会は、世界に向けて友愛党員の結束と繁栄を見せつけるための一大プロパガンダとなっていた。

世界から見捨てられたこの国で……。